# 三和土が足跡だらけ

～カルメンの舞が～

山王二丁目

山王町を中心に界隈の子どものやんちゃぶりは目を覆うばかりだ。町内を縦横に駆け回り、民家商店の別なく勝手放題入っていく。二丁目のクリーニング店では洗濯物の山の中から、隠れていた小鬼がわっと幾人も飛び出してくることも度々だ。大抵は自分の子もまぎれ込んでいるので始末が悪い。とある洋品店では、主人が店先に三和土を作ろうとコンクリートで仕上げ、あとは乾くばかりというところで目を離した隙に数えきれないほどの下駄の跡をつけられてしまった。足跡から、どうやら一人でつけたもので、近所のお転婆で通称カルメン(10)の仕業であることが判明。いずれの場合も、どこの家の子と顔が分かっていることでもあり、叱ったり叱られたりしながら、大人も子どもも互いに成長していくのがこの街の流儀と、この頃はなかば悟りの境地に達しているとのことだ。

# ウーピー!

## 大恐慌をのりきる屋号

飛田本通商店街内に新しい理容院がオープンした。オーナーの吉田友七さん(30)は大阪府南河内郡太子町の出身。大阪で宮大工の修行を積んだのち、神戸で洋家具職人になるなど、異色の経歴の持ち主だ。出店場所を決める際には、大阪中の市電停留所付近の通行者数を自身の足で調べあげたというのだから、気合いの入りようが違う。しかし出店までの経緯は順調とはいかず、警察の出店許可に3年かかるなど、さまざまな苦難に遭遇したという。開業にあたってつけた屋号は「ウーピー」。世界を震撼させている大恐慌の大元アメリカでの流行語で、人びとが景気回復を願う「UP」からとったという。念願の理容院を開業させた吉田さんの強い意気込みが感じられる。西成界隈だけでなく、大阪さらには全国で「ウーピー」の名を轟かせることが吉田さんの夢だ。

# 社説

## 貯める者 使う者

記憶の流通

取材でいろんなお話を伺う中で「使う者、貯める者」という話があった。お客さんとしてお金を使うか、商売をしてお金を貯めるかという二つの立場を対比していて、実際どちらが良い悪いではなくどちらも必要なものではあるのだが、貯めた者は今も生き残っているというお話だ。勿論貯めた者が今も貯め続けているかというとそうではなく、今は使っているという事になり、景気の悪い話といえばそれまでなのだが、そうやって貯めたお金を使う事が、現在貯めようとしている者を潤わしているのも確かで、そのようにして社会は成り立っている。人は暮らして行く中でいろんな体験をして思い出を貯め込んで行く。たくさんの経験をして思い出や体験を貯め込んでいても、お金と違ってなかなかそれを使う事ができないでいる場合も多く、せっかくの体験を埋もれたままにしてしまっている。取材をする我々は、そんな埋もれてしまいそうなお話を伺い、記事を書く事でその思い出や体験を蘇いでは使っていき、少しだけ社会を回す事につながればと願っているのだ。

# 未人廣告

**新聞記者** 西成なるへそ新聞 男女問はず。経験不問 山王一の五の三一 新福寿荘内

**ブレーカープロジェクト** 【電話】〇七〇-五〇四六-八六七七

**情の厚切りサンド** 飛田本通商店街の喫茶神戸屋ウーピーの出すサンドイッチが好評だ。これまでは近くにあるパン屋への遠慮もあり隠しメニューだったが、その店が閉店したため本格デビューとなった。商売上の仁義を切って情厚く仕上げた逸品は、カツ、玉子、トマトの三種、何れも一五〇円。

# 町名変更

東田町⇒太子

ムラタケさんは、近くの太子地蔵にお花を飾ったり水をあげたりと月参りを欠かさない。お菓子屋のお父さんの代からのことだ。明治初頭まで飛田には墓地があった。大坂の陣による戦死者をはじめ処刑された罪人や無縁仏の霊を供養するためにできたという。石の地蔵尊は坐像で、台座をあわせた高さが2mほど。側には無縁塔碑や来歴を記した古い石碑もあり、堺筋に面したところにある。地蔵盆には子供の名前が入った提灯が吊り下げられ大勢の子供らで賑わう。このほど住居表示の変更で町名が東田町から太子に変わったが今も、信心は変わらない。

# 軒先に来る夏

梅雨明けを前に早くも各地で地蔵盆の準備が始まった。新開部商店街の傘提灯では、子どもの名前を提灯に入れる作業の真最中だ。毎年、近在の幼稚園や家庭などから六百に近い注文があるという。三代目のご主人(24)が岐阜県から仕入れた盆提灯に名前を一人ずつ楷書体で記していく。児童に配るまで小半時、天井に吊るしておくが、それでは間に合わず、表の軒先まで利用して墨の香りのする新しい提灯がどんどん下がる。往来の買い物客もこの景色に夏の到来を感じ、子どもたちは吊られた盆提灯に自分の名前を探してはしゃいでいる。折りしも三年に一度の参議院改選と重なって候補者から選挙提灯の注文が引きも切らず、夜まで作業を続けるが暫くは休めそうにない。

# ひと

草田武子さん

梅酒四十年。梅干しも二十年近く漬けている梅のエキスパートで、今年は五キロ漬けた。おすそ分けを楽しみにする人も多い。秘訣はひと粒ずつ丁寧に扱う事だという。ルーツと言える亡き父の漬けた梅干しがある。十くは三十四年前。一九八〇年ものには、申年の梅は縁起よしとある。俗に還暦梅、甲申年の梅だ。次回の二〇四〇年には武子さんは百歳。その梅を孫やひ孫に食べさせるのが今から楽しみ。

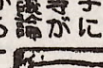
# 西成お地蔵様巡り(六)

昔、病弱な子どもを持ったお母さんが、近所の人の勧めで、作られた自前のお地蔵さん。家も栄えると術がこめられこの名前がある。実際この人の家は事業を大きく展開されている。戦後名踊りもあり、独特の踊りもめったようだ。ラムネがお供えされ、みんな振舞れていた。いつも立派な美しい花が供えられている。(柳本京子)

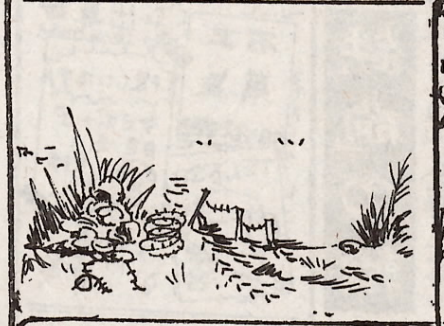
# オーエス劇記

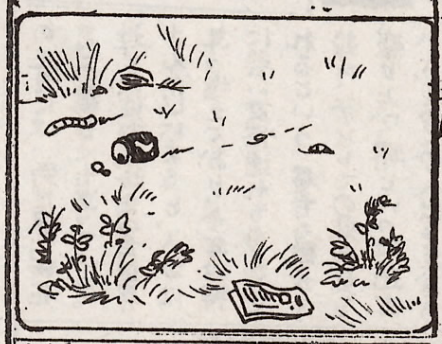
過日は『文化』としてオーエス劇場の大衆演芸を書いた。そして今日はその役者『沢田ひろし』の人と成りを書いて見たい。ほとんどの役者さんは座員の紹介や次の公演先の案内ということで、トークショーを盛り上げている。しかし彼は大事な行演先については一切言わない。ただ大衆演芸の将来について憂いを持っている。しかし決して自己宣伝はしない。又歌を唄う時は替え歌を入れたり、芝居ではご当地の店なり、名物を上手く取り入れたりと、随所に工夫をこらしている。その下調べの憎い事。又地方巡業での名勝旧跡等、その土地の違いを説明してくれている。この様な心憎い配慮は他の役者さんには一切ない味わいである。横切るといったことも考えられる。とはいえ座って話ができるようになって今まで以上に談論風発といくはず、と関係者は大いに期待を寄せている。会議は雨の日と真冬を除いて不定期かつ頻繁に開催されることになる。

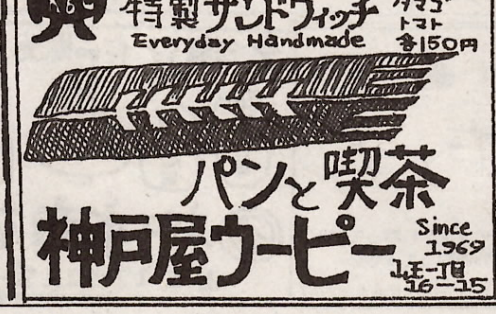
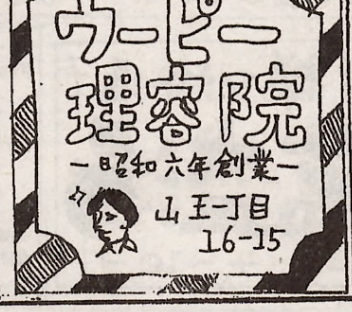
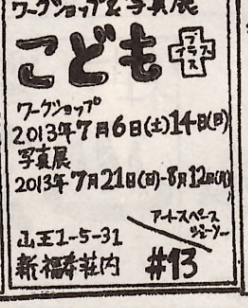
# 第一回山王井戸端会議開催!



山王一丁目の路地奥で、第一回山王井戸端会議が近く開かれ、近隣の話し好きの奥女数名が心ゆくまでおしゃべりを堪能する。これまでは大浦さん宅前で立ち話をしていたが、有志の手により椅子やソファー等が設置され、長時間の議論も可能となったことから改めて第一回会議を招集した。特に決まった議題は設けず、出席者自身の健康問題や町内のうわさなどを自由気ままに話す。採決を取ることもなく、熟議を尽くすスタイル。気心さえ知れていれば、職業、出身地に関係なく傍聴や発言をすることもできるという。一方で、議場が住宅密集地にあるために会議中に通行人が





# 都会の灯

新開橋までの北門通りに灯る、赤い灯、青い灯。それはカフエーの街灯である。納所初美さん(31)は西成へ移り住んで来て、その灯に目を輝かせている。「田舎から出てきたから、西成はすごいなあ。きれいな灯や。」お祭りでなくても、毎晩人通りは多い。ましてや、天神祭りのときはもうすごい人だ。子どもに五百円を握らせ、遊びに向かわせると、お菓子や水風船ヨーヨーなどを買ってきた。通りには屋台まで出て、お茶も振る舞われている。納所さんは、毎日、青空市場での買い物や、家事に従事していて、家に居ることが生活の中心なので、カフエーへ入る必要はなく、実際、お茶をしたことはない。しかし、あの赤い灯と青い灯は、自分が都会にいることを実感させてくれる灯りなのだと言う。